実施日程・実施校

2020年10月5日（月）	水俣市立袋中学校
2020年10月7日（水）	湯前町立湯前小学校
2020年10月9日（金）	うきは市立山春小学校
2020年10月19日（月）	長与町立長与南小学校
2020年10月20日（火）	鹿島市立七浦小学校
2020年10月21日（水）	南島原市立加津佐小学校
2020年10月23日（金）	福岡市立若宮小学校

谷桃子バレエ団

＜出演＞ ※出演者は開催校により交代します

オデット／オディール　竹内菜那子（10/5,9）　馳　麻弥（10/7,20,23）　山口緋奈子（10/19,21,22）

王子ジークフリート　齊藤拓（10/5,9,22）　吉田邑那（10/7,19,20,21）　今井智也（10/23）

王妃　日原永美子（10/5,7,9）　尾本安代（10/19,20,21,22,23）

悪魔ロットバルト　横岡諒

道化　田村幸弘（10/5,9,20,23）　牧村直紀（10/7,19,21,22）

四羽の白鳥　齊藤耀　前原愛里佳　浅野華子　星加梨那　蓮池うい（以上より交代で４名出演）

白鳥たち　永井裕美　森本悠香　塚田七海　荒川みなみ　北浦児依　古澤可歩子　篠塚真愛
島 亜沙美　佐藤舞　白井成奈　大川実久　蓮池うい　手塚歩美　石川真悠　（以上より交代で12名出演）

花嫁候補の姫たち　永井裕美　荒川みなみ　北浦児依　佐藤舞　白井成奈　平野彩　橋口綾乃　渡部栞（以上より交代で４名出演）

スペインの踊り　森本悠香　古橋可歩子　篠塚真愛
市橋万樹　土井翔也人
（以上より交代で男女２組出演）

ハンガリーの踊り（チャルダッシュ）　齊藤耀　前原愛里佳　星加梨那
菅沼寿一（以上より交代で男女１組出演）
大川実久　蓮池うい　手塚歩美　梅田胡桃　島 亜沙美
牧村直紀　田村幸弘　服部響　池澤嘉政　清水豊弘（以上より交代で男女４組出演）

＜解説者＞　日原永美子（10/5,7,9）　尾本安代（10/19,20,21,22,23）

＜スタッフ＞

監修：赤城圭　芸術監督：髙部尚子　バレエミストレス：日原永美子　バレエマスター：中武啓吾　解説：尾本安代
ピアニスト：稲葉智子（録音）　舞台美術：橋本潔　衣裳美術：緒方規矩子　照明：中沢幸子
大道具：ユニ・ワークショップ　音響：矢野幸正　舞台監督：伴美代子　制作：（一財）谷桃子バレエ団

谷桃子バレエ団について

About us!

20世紀のプリマバレリーナとしてとても人気のあった谷桃子が、第二次世界大戦後間もない1949（昭和24）年に設立しました。「白鳥の湖」「ジゼル」「ドン・キホーテ」など、たくさんの古典名作を上演しています。また、創作作品による公演にも熱心に取り組み、スウェーデンの前衛的な振付家クルベリによる「ロメオとジュリエット」をいち早く紹介するなど、新作や話題作を毎年上演しています。

谷桃子は、1984年に紫綬褒章、1993年に勲四等宝冠章を受章し、60年以上に亘り、振付の指導やダンサーの育成をするほか、日本バレエ協会の顧問を務め、日本のバレエ芸術の普及に大きく貢献しました。

知っていますか？

～10月1日は「国際音楽の日」です～

1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることにしました。日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

ようこそバレエの世界へ！

令和２年度

ぶんかげいじゅつ　こどもいくせいそうごうじぎょう　じゅんかいこうえんじぎょう
文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演事業－

バレエ公演

構成・出演　谷桃子バレエ団

第一部
＜実演と解説＞

バレエを知っていますか？

第二部
＜公演＞

「白鳥の湖」ダイジェスト版

「文化芸術による子供育成総合事業－巡回公演事業－」

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、公演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

バレエを知っていますか？

Do you know about ballet?

バレエを観る前に、バレエのことを少しでも知っていると、もっと楽しく理解も深まると思いますので、バレエが始まる前に読んでみてください。

バレエの歴史は、約 500年前にさかのぼります。そのころ、イタリアでは、領主や貴族が毎日のように宴や舞踏会を開いていました。国と国が勢力を争う時代には、こうしたことが大切でした。長い時間、食事を楽しむために、音楽、歌、踊りなどが加わり、舞台背景や舞台装置もいろいろと工夫されました。大広間をプールのようにして、舟を浮かべて、海戦さながらの場面を見せたこともありました。ときには怪獣も登場しました。夜空には、花火もたくさん打ち上げられました。こうした舞踏会を「バレット」と呼びましたが、踊りだけの舞台ではなく、劇も演じられ歌も歌われ、仮面をつけることもありました。あのレオナルド・ダ・ヴィンチもこうした舞台の装置や衣裳を手がけています。

やがて「バレット」はフランスにもたらされて「バレエ」と呼ばれました。フランスではイタリアのように大きな声で歌うよりも、踊りの方がよろこばれました。とくに、バレエの王様といわれたルイ 14世は、バレエが大好きで舞台で踊ることに熱中し、ときには太陽の衣裳を着て登場したので「太陽王」と呼ばれました。ルイ 14世は太りすぎて踊れなくなるまで踊りつづけ、バレエを盛んにするために「王立舞踊学校」を、踊るための舞台として「パリ・オペラ座」劇場を作りました。

パリ・オペラ座劇場

バレエは、ヨーロッパや東洋の国々に伝わる民族舞踊からも、いろいろな踊りをとりいれ、変化のある動きをひろげてゆきましてが、バレエにとっていちばん大切なことは、「軽く空を飛ぶように踊る人間の夢」を叶えることでした。

女性の踊り手「バレリーナ」たちは競いあい、スカートを短く、靴のかかとを無くし、ときには裸足になりました。そのうちに、バレエを踊るためになくてはならない「トウシューズ」があらわれて、その夢がかないました。「トウシューズ」をはくと、つま先で立って踊ることができ、回転も自由です。こうして風に舞う木の葉のように、森を吹き抜ける空気の精が主役の『ラ・シルフイード』（空気の精）という作品がつくられました。衣裳も、「ロマンティック・チュチュ」と呼ばれる、円錐形に裾がひろがるスカートとなります。この時代の代表的な作品は、ほかに『ジゼル』があります。

ロマンティック・チュチュ

クラシック・チュチュ

このバレエの華やかさにあこがれる国が現れます。ニコライ皇帝のロシアです。皇帝は、フランスから偉大な振付師マリウス・プティパを招きました。プティパは、ロシアの作曲家チャイコフスキーによる『白鳥の湖』『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』などを世に送り出しました。衣裳では、裾が短くぴんと張った「クラシック・チュチュ」があらわれ、「トウシューズ」とあいまって、バレリーナは、さらにすばらしく美しい舞台を見せることができるようになりました。このような作品を「クラシックバレエ」といい、女性の踊り手「バレリーナ」が中心になって活躍する時代でしたが、それにひきかえ男性の踊り手のほうは、バレリーナを高々ともちあげる役割が強くなっていきました。

やがて、「クラシックバレエ」が、古めかしく感じられるようになります。19世紀にはいると、ディアギレフという偉大なバレエのリーダーとともに、ニジンスキーという男性ダンサーを中心とした踊り手たちがロシアからパリに現れました。有名な「バレエ・リュッス（ロシアバレエ団）」です。ニジンスキーの踊りは、空中で止まっているといわれたほどのジャンプ力がある天才的なものでした。彼がロシアで踊っているとき、背景画家になるつもりだったシャガールは、その踊りに深く心を打たれました。シャガールの絵には、空を浮き上がるように人物や花が描かれています。ディアギレフは、パリの若い画家ピカソ、ブラック、ルオー、マティスや作曲家ストラヴィンスキー、詩人のジャン・コクトーといったパリの芸術家の協力を得て、バレエを現代的なものにと発展させ、パリの人々を熱狂させました。レオン・バクストがデザインしたバレエの衣裳を真似したファッションは、パリ中に流行したほどです。

「バレエ・リュッス」の活躍に対して、アメリカからは新しい舞踊をめざした女性イサドラ・ダンカンが現れ、ヨーロッパで評判となりました。「ギリシャに戻れ」とタイツを脱ぎ素足で踊り、あらゆる束縛から離れて、決まった型をもたない自由な動きを求めました。これが「モダンダンス」です。こうして、一時はそれぞれ別の方向に向かいましたが、今では「バレエ」と「モダンダンス」のあいだに壁がありません。現代は自由に踊る時代です。こうした流れはどんどん広がるでしょう。そのなかで、踊る人間の身体が見せる美しさと心の表現を、どこまでも追い求めようとする心がバレエを支えています。

明治期の旧帝劇／
東京風景（小川一真出版部）より 国立国会図書館蔵

日本で「バレエ」が初めて踊られたのは 90年前、大正 11（1922）年でした。当時の帝国劇場で世界的なバレリーナ、アンナ・パブロヴァが、サン＝サーンスの曲による『瀕死の白鳥』を踊りました。初めて本場のバレエを見た日本人は信じられないほど多く、 20 日間の公演は連日大入り満員でした。入場料金は破格の高さでしたが、それでもチケットを買い求める人は多く、手に入れるのが大変だったといわれています。

昭和 21（1946）年、戦争が終わってまだ 1 年目、東京中が焼け野原から立ち上がろうとしていた時代に、同じ帝国劇場で日本最初の『白鳥の湖』全 4幕が初演されました。多くの人々は、この舞台から夢と希望を受け、そして、日本の「バレエブーム」が始まりました。日本の『白鳥の湖』全幕初演は世界の中でも早く、イギリスでの初演ももう少し後でした。

橋本　潔（舞台美術家）

バレエ「白鳥の湖」のこと

ロシアの作曲家チャイコフスキーが作曲したドラマティックバレエ。1877年の初演では失敗作といわれましたが、1895年に二人の名振付家プティパとイワノフが振付け直したところ大変好評を得て、今では「眠れる森の美女」と「くるみ割り人形」と共にチャイコフスキーの三大バレエと呼ばれ、クラシックバレエの代表作品として世界中の人々に愛されている作品です。

あらすじ

悪魔ロットバルトの呪いで白鳥の姿に変えられた美しいオデット姫とジークフリート王子との永遠の愛の物語――夜の間だけ人間の姿に戻ることが出来るオデットと湖のほとりで永遠の愛を誓った王子。しかし舞踏会に現れた、オデットそっくりに似せた悪魔の娘オディールに心を奪われ、愛を誓ってしまいます。

悪魔の企みにのってしまった王子は自らの過ちを悔いオデットに謝罪します。王子を許すオデットでしたが、もう一生魔法が解けないことを悲しみ、湖に身を投げてしまいます。愛するオデットを追って自らも身を投げる王子……二人の強い愛の力の前に悪魔は滅びるのでした。

わかりやすい物語に四羽の白鳥、各国の舞踊やオディール（黒鳥）の 32回にも及ぶグラン・フェッテ（回転）など、見応えのある踊りが盛り込まれています。